

もう一人の鬼太郎とその原像

——伊藤正美作「墓場奇太郎」をめぐって——

蛸 島 直

キーワード：伊藤正美、水木しげる、カニバリズム、鬼子、蛇女房、異類婚姻譚

はじめに

水木しげる（本名武良茂、1922–2015年）は、日本民俗学会の会員でもあり、その創作活動において、多くを民間伝承に取材している¹⁾。水木自身も、柳田國男の『妖怪談義』のものを絵にした」と述べているが〔水木 1974：17〕、鬼太郎の盟友、ヌリカベ・イッタンモメン・コナキザヂ・スナカケババも同書所収の「妖怪名彙」にみる妖怪で、採録地はそれぞれ、福岡・鹿児島・徳島・奈良県であった〔柳田 1956：218, 221, 227〕。

では、主人公の鬼太郎の場合はどうであろう。「鬼太郎」「きたろう」、念のために「おにたろう」なる名称を『妖怪談義』に探してみても見当たらない。しかし、鬼太郎の成立に関して、名称以外での民間伝承への依存度はかなり高いものといえる。鬼太郎は、土葬された母親の死骸から誕生している。現在放映中のテレビアニメ第6シリーズのオープニングでも墓場から鬼太郎の手が現れている。これが、民俗学や昔話研究でいう「子育て幽霊」あるいは「飴買い幽霊」に通じることはいうまでもなく、水木自身も、『水木しげるの妖怪事典』の「飴屋の幽霊」において「ぼくは『鬼太郎の誕生』にこの話を借用したことがある」と記している〔水木 1981.8.30：122〕。

なお、水木の「鬼太郎」には、紙芝居上の先行作品が存在していた。伊藤正美原作の「墓場奇太郎」である。もちろん、水木の「鬼太郎」には、新たな諸要素が付加され、その多くは民間伝承に取材していると考えられる。それらについては、機会を改めて議論したいと考えるが、本稿では、資料の制約が大きいものの、伊藤作品における主人公「奇太郎」に注目し、ときに水木の「鬼太郎」のそれと比較しながら、関連する民間伝承等を指摘し、それらからの影響について考察を行いたい。なお、伊藤の「奇太郎」の誕生と成長については、すでに姜竣による優れた研究がある。そこでは、子育て幽霊、高僧誕生に関する縁起、産死にまつわる俗信等との関連が指摘・考察され、同じく異常

誕生の設定を含む後続の紙芝居作品の紹介と考察が行われているが [姜 2007 : 131-159]²⁾、本稿では、奇太郎に認められるカニバリズム (食人俗)、鬼子、異類婚姻譚の要素に主眼をおいて、考察を進めていきたいと考える。

1. 水木版鬼太郎の成立

「ゲゲゲの鬼太郎」は、水木しげるの代名詞ともいえる作品であるが、平林重雄によれば、「鬼太郎」の名が水木作品に初めて登場するのは、1954年の紙芝居作品「蛇人」「空手鬼太郎」であり、6年後の1960年には、貸本誌『妖奇伝』に「墓場の鬼太郎」の掲載が開始されている [平林 2005 : 482-483]。その後、1968年のテレビアニメ化にあたり、スポンサーへの配慮から、「水木しげるの子ども時代のあだ名“げげ”をもじって『ゲゲゲの鬼太郎』と改められ」、原作漫画も同名に改称して『少年マガジン』1967年11月12日号から新連載されることになったという [平林 2007 : 108]。

時間が前後するが、ここで水木と紙芝居との出会いについて確認しておきたい。平林によれば、1950年、28歳の水木は、神戸市兵庫区水木通りでアパート経営を開始する。地名から「水木荘」と命名したのが、後のペンネームの由来となる。入居者に紙芝居絵描きがいて、水木も技術を教わり習作を描くようになった。翌年、紙芝居演者の名人鈴木勝丸の経営する阪神画劇社の専属画家となり、鈴木を紹介で加太こうじと知り合う [平林 2005 : 482]。加太 (1918-1998) は、自らも紙芝居作家であり、当時、東京における紙芝居の胴元の一人として有名であったが、後に風俗史評論家となる [鶴見 2012 : 399, 460]³⁾。この辺の事情について、水木自身は後に次のように語っている。

鈴木勝丸氏と加太氏は、ぼくに、昔、東京で、伊藤正美という人の『ハカバキタロー』というのが、流行したことがあるから、それに似たようなものをやってみてはどうかといわれた。ぼくは『墓場の鬼太郎』と名づけてやったが、いわゆるこのころ、流行の因果物というやつだったから、勝手がわからなくて、なかなかうけない。(略) 始めはグロテスクすぎて、失敗したのでこんどは、兄貴の子どもをモデルにして、『空手鬼太郎』として、沖縄に行つて空手をやる話で、いくらかうけて、ホッとした。 [水木 1998 : 154-155]

加太の著書『紙芝居昭和史』には、神戸時代から上京に至る水木の様子が次のように記されている。

絵もうまくなったが、台本作りには独特の個性を発揮した。鈴木は伊藤正美作『ハカバキタロー』のあらすじを水木に話したので、水木は彼の台本で『墓場奇太郎』を描いた。のちに上京して貸本用単行本の仕事をしたとき、伊藤正美の諒解を得て文字づらを変えて『墓場の鬼太郎』としたときいている。 [加太 1971 : 259-260]

水木と加太、二人の述懐によれば、「キタロー」は水木原作ではなく、伊藤正美原作

であり、鈴木と加太は、水木にそのハカバキタローに「似たようなものを作ってはどうか」と勧めたことになる。平林によれば、『ハカバ奇太郎』は、「伊藤正美の原作、辰日恵洋の作画によって、1932年（昭和7）年頃、東京の富士会から出版された紙芝居」だという〔平林 2007：15〕。

なお、加太は「文字づらを変えて」と記しているが、ここには疑問が残る。平林の著書にはこの紙芝居の貴重な表紙が、図版として示されている。しかし、その作品名は片仮名ではなく「墓場奇太郎」と右横書きで漢字表記されている〔同〕。鈴木常勝の著書にもこれと同様な構図だが別の組と考えられる表紙の図版、また、筑豊における「墓場鬼太郎」の実演場面の写真（西日本新聞社提供）が掲載され、縦書きで「○場奇太郎」と記された表紙を見ることができる〔鈴木 2007：105, 109〕。○の部分は演者の手で隠れているが、「墓」であったと考えられる。キャプションには“福岡の紙芝居屋・吉住信勇と筑豊のヤマ（炭鉱）の子どもたち。「今日は『墓場奇太郎』があるばい」1971年”とあるので、この作品がかなりの長命であり、水木の鬼太郎のテレビアニメ化を奇太郎が見届けていたということになる。

さて、これら3点の資料から、加太のいう題名の「文字づら」の変更は、「奇太郎」から「鬼太郎」へと漢字一文字の変更だったものと考えられる。とはいえ、媒体は紙芝居、しかも約70年前のことである。手描きの書写が繰り返されていたものと考えられるので、加太のいう片仮名版「ハカバキタロー」が實在・先行していた可能性も高かろう。あわせて、著作権等の問題が気になってくるが、この点、「伊藤正美の諒解を得て」と加太が記しているので、問題はなかったはずである。加太と伊藤とは、1938年頃、紙芝居の製作を通して知り合い、以後長い交友が続いていたのである〔加太 1985：116〕。その加太と鈴木勝丸が水木に作画を勧めたのである。伊藤の諒解は得やすかったと考えられる。

さらに、当時の紙芝居の世界には、今日の文筆の世界とはほど遠い独特の風土があったようである。自らが紙芝居屋であり紙芝居の研究者でもある鈴木常勝は著書『紙芝居がやってきた!』において「面白いから、いただきます：小説・映画・漫画から紙芝居へ」との見出しのもと「『パクリ』は紙芝居の常道じゃ。『紙芝居ごとき』に誰も文句はつけぬわい」と表現し、映画「むつつり右門」や漫画「まぼろし探偵」をパクった紙芝居作品を紹介している〔鈴木 2007：88-89〕。映画・漫画から紙芝居へ、さらに紙芝居間の借用は当たり前のように行われていたようである。同書には、「墓場奇太郎」から派生したと考えられる『泣くな！奇太郎』の何コマかが図版とともに掲載されている〔同：24, 87, 118〕。姜は、この作品中の奇太郎と伊藤のそれとの形相が「ほぼ重なりと同時に、死人から生まれたという設定も同じ」であることを指摘している〔姜 2007：138-139〕。

2. 伊藤版奇太郎の誕生

「ハカバキタロー」の誕生について、加太は、次のように記している。

物語は関西の古めかしい農村と思われる地帯からはじまる。姑の嫁いじめでいびり殺された嫁は妊娠したまま土葬にされた。その死骸から生まれた赤ん坊は母の屍肉を食べて土中からはいだした。そして、やや大きくなってから母の復讐をする。まず、母をいじめころした姑を殺してつるべ井戸へ吊りさげた。 [加太 1971：85-86]

第一の復讐に続き、数々の怪事件が連続して起こったが、発端の物語が受け、キタローはのちには都会にも進出する。話はシリーズとなり、昭和8年頃から10年頃まで続き、「あのほうではキタローが善玉めいた活やくをする怪奇大活劇になったが、昭和8年頃には『少年タイガー』とならんで『黄金バット』を圧倒する人気を得た」という [同：86]。

加太は『名もなく すがしく したたかに：街のエリート聞き書集』と題する編著書において16ページにわたる伊藤からの聞き書きを記述している [加太 1985：117-133]。

伊藤は、京都生まれの神戸育ち。関西大学の英文科出身で、川崎造船所航空機部門の庶務課に勤務したが、小説家を志して上京。尾崎士郎や徳永直を訪ねたりしている。紙芝居の製造貨出しを行う五島金之輔ごしまきのすけに台本作家としての才能を見込まれ、五島経営の富士会の二階に住み込むことになる。加太のインタビューに対し、伊藤は次のように語っている。

そこで住み込むとすぐに作ったのが『ハカバ・キタロー』でした。あれは、関西方面にあった姑の嫁いじめの話で、意地悪姑にいびり殺された嫁が土葬になった。嫁の腹のなかに赤ん坊がいて墓場の土の下で生まれて、母の屍肉を食べて地上にでて、姑に復讐するという陰惨な話でした。どうしたら、こわくできるかってことばかり考えて作りました。おじいさんが帰ってきたが暗い部屋のなかに、おばあさん、悪姑の姿が見えない。水を汲もうと井戸へ行つてつるべの綱を引くと、水桶でなくて、首をくくられた姑の死骸があがってくる、屋根の上で奇怪な子どもの墓場鬼太郎がイヒヒヒヒって笑っているなんてのが、あのシリーズのはじめにあって、黄金バットのSF、山川惣治さんのジャングル物の『少年タイガー』に次ぐ、当時の紙芝居の人気番組になった。それで、富士会には紙芝居やさんが絵を借りにどっと押しかけてくる。飴の中継ぎの卸のもうけが大きい。 [加太 1985：123]

土葬された母親の死骸から赤子が誕生するというのは、水木も言及し、姜が指摘するように、民俗学や昔話研究でいう「子育て幽霊」に通じるもので、水木の「鬼太郎」の誕生にも踏襲されている。だが、伊藤作品においては、生存のためとはいえ、飴ではなく母親の屍肉を食すという凄惨な展開となっている。

なお、平林と鈴木常勝それぞれの著書に掲載されている紙芝居「墓場奇太郎」の表紙

[平林 2007 : 15, 鈴木 2007 : 105] に注目してみたい。いずれも穴から這い上がろうとする奇太郎の姿が描かれているが、その姿には興味深いものがある。右眼は大きく見開いているが、左眼はほぼ閉ざされるか [平林 同]、非常に小さく描かれ [鈴木 同]、左右の非対称が著しい。そして、なんと、前歯が生え、おかっぱのような髪型で、衣服を着ているのである。

以下、限られた情報からではあるが、後の水木作品とは異なる要素のいくつかに注目し、必要に応じて水木の鬼太郎と比較しながら、関連する民間伝承を指摘し、その影響の可能性について考察していきたい。

3. 嫁いびりと尊属殺人

奇太郎の母は姑にいびり殺され、土中で誕生した奇太郎は祖母を殺害して復讐を遂げる。あまりに陰惨であるが、加太によれば、当時、「姑の嫁いびり」は「継子いじめ」と並んで「紙芝居における悲劇の代表的素材であるばかりでなく、残酷物のありふれたスタイルでもあった」。そして、「『ハカバキタロー』の新しさは、復讐によってうらみを晴らすところにあった」という [加太 1971 : 91]。

ちなみに、後述する「化け猫」をモチーフとする紙芝居作品の一つに「赤い雪」（神港画劇協会・入江将介作・森島絵）がある。鈴木によれば、父殺しの犯人大三郎と結婚した琴江の飼ひ猫である玉は犯人を見破ったがゆえに大三郎になぶり殺される。玉の魂は琴江の口に入り、赤ん坊のお君に乗り移り、やがて実の父大三郎に復讐して自らも命を落とす [鈴木 2007 : 65-69]。因縁めいた創作であるが、ここでも、奇太郎同様、尊属殺人が行われている。刑法上の尊属殺人罪が存在していた当時は、今日に比してより罪深く、陰惨なものとの印象を与えていたと想像される。

ここで、口承文芸における尊属殺人を考えると、娘が親を食い殺すという「姉は鬼」型が思い浮かぶ。しかし、その娘とは、鬼や大蛇あるいは山姥が姿を変えたものであり、直接の尊属殺人とはいいがたい。「姥捨て山」型では老人遺棄という間接的・消極的な親殺しが試みられるが、きまって未遂に終わっている。『日本昔話通観』が収録する遠野市の「婆の新生」では、親孝行だった息子が嫁の言うままに母親の入った小屋に火を放つ。母親は「鬼子」と出会い、機転によって打ち出の小槌を手に入れ女殿様となる。欲を出した嫁が小屋に入り、夫に火をつけさせるが、黒焦げになって命を落とす [稲田・小澤 1985 : 388]⁴⁾。嫁姑間の軋轢という要素は奇太郎の誕生譚に共通するが、あわせて注目されるのは「鬼子」の介在である。後に述べるが、奇太郎には鬼子としての要素がほぼ出揃っているのである。なお、遠野のこの話では鬼子は少なくとも婆にとってはプラスの価値をもつが、一般にはマイナス価値が目立つことになる。

4. カニバリズム

奇太郎は土葬された母の屍肉を食して地上にでる。現実には想像しがたい究極のカニバリズムである。創作上のものであるが、後述するように、日本にはその下敷となる伝承が存在している。ここで、カニバリズムをめぐる研究史を概観しながら、奇太郎によるカニバリズムの意味と性格について検討してみたい。

カニバリズム (cannibalism) あるいは食人俗 (anthropophagy) については、その資料の信憑性がしばしば問われ、W. アレンズなどは、「社会的に受け入れられた慣習としての食人の存在」を疑っている [アレンズ 1982: 9]。確かにカニバリズムをめぐることは異国趣味的な脚色や神話化が行われてきたことは否定できないが、アレンズの極論ともいえる主張はその後、多くの研究者によって否定されている [山田仁史 2017: 146-155]⁵⁾。

ここで、Shirley Lindenbaum が挙げるカニバリズムの諸類型を再整理してみよう (番号は筆者)。まず、懐疑論者も疑い得ないものとして、①生存のための食人と②精神病的食人がある。さらに、よく受け入れられた範疇として、③族内食人 (endocannibalism) と④族外食人 (exocannibalism) がある。前者は、葬儀に伴う摂取であり、遺体のすべてあるいは一部が、愛情による行為または集団の更新や再生を目的として摂取され、後者は、攻撃的行為としてしばしば戦争に際して行われる。⑤医療的食人 (medical cannibalism) は、ヨーロッパにも認められ、人体の各部位が対象となる。つぎに⑥自食現象 (auto-cannibalism, autophagy) があるが、これには、爪噛みや胎盤の食用も含まれ、後者は1970年代のアメリカでも増えているという。ときに③に含まれようが、⑦骨灰食人 (bone ash cannibalism) があり、⑧生贄的食人 (sacrificial cannibalism) はアズテクの事例がよく知られるが、聖体拝領もその象徴的延長といえる。最後に⑨無意識裏の食人 (innocent cannibalism) が挙げられるが [Lindenbaum 2004: 477-479]、これは日本のかちかち山が実話だったらという類のものである。

さて、奇太郎による、母親の屍肉食であるが、①生存のための食人であるとともに、③族内食人といえる。しかも、一親等血族間での究極の族内食人である。Ivan Brady は、カニバリズムを、(1)飢餓に際して親族に敬虔で自己犠牲的に食糧を提供する良心的行為、(2)死した親族との連続性を示す儀礼的な身体の部分的摂取、(3)戦争における敵の捕獲と摂取、と3類型 (番号は蛸島) に大別している [Brady 1996: 163]。Lindenbaum の示した類型に比して精緻さを欠くが、(1)の自己犠牲という要素は奇太郎母子の場合に当てはまるものといえよう。もちろん、母親による屍肉提供の意思の存否は確認しえないのだが……。さらに、後に母親の仇討ちを行うこと、また後述するように、奇太郎はしばしば墓場に舞い戻るということから、(2)死した親族との連続性を示すという要素も認められよう。

実は、あまり知られていないようだが、日本では、「骨かみ」「骨こぶり」などと呼ばれる葬儀における食屍習俗が豊かに伝承されている [国分 1970 : 448-453, 飯島 1984 等]。火葬骨を食することは現在も行われ、筆者もかつて、下北半島の口述者の一人からその体験談を聞くことがあった。なお、母の屍肉を食した奇太郎は母の仇討ちを成し遂げるが、カニバリズムと復讐との関連は、近年の日本の暴力団の世界に認めることができる。

近藤雅樹は、暴力団の殺戮抗争にからむ 2 事例を紹介している。一つは溝口淳の著書からの引用である。1976年、松田組系の大日本正義団吉田芳弘会長が山口組傘下の者により射殺されたが、同団幹部の鳴海清は、「吉田の遺骨を嚙んで『親分を取られたからには田岡を取る』と復讐を誓ったという。もう一例は、1985年、山口組 4 代目組長竹中正久が殺害されたとき、火葬場で竹中組長の骨灰を酒に入れて組員たちが飲み、復讐を誓ったという『夕刊フジ』の記事である [近藤 2012 : 404, 406]。Lindenbaum の示した⑦骨灰食人に相当するとともに、おそらくは親分・子分という擬制的親子間の③族内食人ともいえ、なによりも、目的が復讐の遂行にあることが注目される。

国分直一は、日本、中国、アフリカ、インドネシア、メラネシア、ポリネシア、オーストラリア、中南米を視野に、食人の動機について、食料を得るための食人を例外的にとらえ、一般には、(a)死者と一体になる儀礼的食人、(b)ある優秀な能力やスピリットを自らのものにする呪術的食人、(c)神への犠牲、(d)復讐のための食人、(e)治病のための食人の 5 点を挙げている [国分 1970 : 450-451]。(d)の「復讐のための食人」であるが、この表現からは、復讐対象を摂取するのか、復讐対象による犠牲者を摂取して復讐を誓願するのか、二通りの解釈が可能である。国分がどちらかの一方あるいは双方を意識していたのか不明であるが、後者であれば、一部の暴力団関係者が意図的に行う類型であり、結果的に奇太郎にも該当しうるものとなる。

Lindenbaum が示した諸類型には「復讐」のためのそれは認められない。山田は、初めて食人俗を包括的に扱った研究として、ドイツの地理学者・民族学者であるリヒャルト・アンドレーの1887年の著書を紹介している。筆者は未読であるが、アンドレーは、アジア、アフリカ、オーストラリア、オセアニア、アメリカの例を列挙し、「食人俗の二大動機は、復讐欲と俗信（相手の能力などの獲得）、と結論した」という [山田仁史 2017 : 131-132]。「復讐」は初期の研究段階から重要な要素とされていたのである。Lindenbaum による豊かな文献目録にはアンドレーや国分の研究は含まれていない。最新の研究動向を整理・紹介するという掲載誌の性質上、やむを得ないが、今後、カニバリズムの類型論が再整理される時、「復讐のための食人」という類型か下位分類が追加されてよいと考えられる。

ところで、屍と復讐の誓いと関連は、鍋島の化け猫騒動に先例を認めることができよう。竜造寺又七郎は、碁の勝負から丹後守の怒に触れて手討ちになる。これを知った

母は自殺したが、その血をなめた飼い猫が怪物となって復讐を企てる。後半では、丹後守の愛妾を喰い殺してこれに化け、太守へ危害を加えようとする [日野 2006 : 153]。血を身体の一部と考えるならば、主体は猫であれ、広義での食人となろう。また、仮に飼い主／飼い猫の関係を親子関係に擬すれば、族内食人という性格を帯びることにもなる。

Lindenbaum は、てんかんの治療に人間の血を飲むというヨーロッパの⑤医療的食人の例を挙げ [Lindenbaum 2004: 478]、先述のように、聖体拝領を⑧生贄的食人の象徴的延長ととらえていた [同 : 479]。もちろん、伝説や創作上の食屍的要素をカニバリズムの類型論と直接結びつけることには慎重でなくてはならない。

佐賀鍋島の化け猫騒動は非常に有名で、とくに講談によって知られるようになり、明治中頃には、絵本類も出版され、1930年代後半には、怪猫を主題にした「化猫映画」が次々に封切られている。ただし、こうした怪猫譚に先行する民間伝承は認められないようで、『日本昔話通観』や『日本伝説大系』にも類話を含めて所収は認められない。すなわちこの怪猫譚は、創作と考えられるのだが、高座や舞台、紙芝居、映画、書物から得られた知識が、親から子などへと口承され、そこに新たな民間伝承が生まれていたという可能性はあろう。媒体は問わないことにしても、奇太郎による母の食屍と復讐に関して、伊藤がこの種の化け猫譚を下敷にしたという可能性は十分ありえよう。なお、1930年代には、『佐賀怪猫伝』(1937年)、『有馬猫』(同)、『怪猫五十三次』(1938年)、『山吹猫』(1940年)などの「化猫映画」が続々と封切られ、女優の鈴木澄子は「化猫女優」の異名を取り、戦後には入江たか子はその名を継承したという [広岡 1985 : 1045]。内容は確認できないが、石山幸弘によると、『猫娘』と題する紙芝居が、東京の街頭紙芝居会社である話の日本社から1931年10月頃に封切られている [石山 2008 : 48]。この作品は、一連の化猫映画に先行しており、講談から映画へという流れに、紙芝居が介在していた可能性が考えられる。鈴木常勝が、「常道」と呼んだ映画から紙芝居への「パクリ」 [鈴木 2007 : 88-89] とは逆の流れもありえ、紙芝居は、後の黄金バットや鬼太郎の映画化により、十分に借りを返したともいえよう。

水木は、伊藤正美原作の奇太郎から、多くの要素を借用しているが、その誕生に際しての母の屍肉食については踏襲が認められない。竹内オサムによれば、水木は「民間伝承の物語世界を視覚化」しており、水木の妖怪たちを「民俗学的妖怪」と呼んでいる。一方、手塚治虫も敗戦直後、妖怪マンガを描いていたが、それらは「ひとつ目や結合体双生児などのフリークの群れ」であり、竹内は、それを「生物学的妖怪」と呼び、二者間の大きなイメージの対照を指摘している [竹内 2010 : 70]⁶⁾。

伊藤の奇太郎は、民間伝承への取材という点で、前者の性格が濃いのが、屍肉食による生存という点では、「生物学的妖怪」としてのなまなましが伝わるようでもある。多様な生物界に視線を移すと、屍肉食・腐肉食を含め共食いはまったく珍しくはない。ち

なみに、「共食い」を表す英語の生物学上の用語も、*cannibalism* に他ならない。動物学者であり、作家でもあるビル・シャットは、2017年に、*A Natural and Unnatural History of Cannibalism* を上梓し、同年『共食いの博物誌：動物から人間まで』との書名で日本語訳が刊行されている。シャットは、カニバリズム（共食い）を「ある生物種の個体が同じ種の別の個体の全体または一部を摂取する行為」と定義している [シャット 2017: 30]。無脊椎動物の多くは同じ種の個体を餌としか見なせないのだし [同: 46]、脊椎動物であってもアシナシモリの胎児は、生まれる前に歯を使って母親の卵管の内壁を食べているという [同: 113]。もちろんこれは母親の生命に別状はなく、生体間カニバリズムともいえよう。奇太郎が示した母子間のカニバリズムは、定義を拡大すれば動物界に実在することになる。

5. 蛇女房と目の玉のカニバリズム

カニバリズムとの関連で、比較したいのは、「目の玉型」と呼ばれる蛇女房譚である。そこには、母子間生体カニバリズムとも呼びうる要素が認められるようである。熊本県阿蘇郡蘇陽町の男性話者が語るところでは、妻は夫に咳払いをして帰宅を知らせるよう約束させていたが、夫はある日、禁を破り、赤子を中央にとぐろを巻く蛇の姿を目撃する。妻は夫に目玉を一つ与え、それを赤子にねぶら（舐ら）せるよう言い残し、池に向かう。赤子はそれをしゃぶって育つが、それを知った殿様が玉を取り上げる。夫が池を訪ね、事情を話すと蛇はもう片方の目玉を与えたが、再び殿様に取り上げられる。蛇は父子に逃げるよう伝え、雲仙が岳を崩して復讐する [稲田・小澤 1980a: 27-28]。九州地方には、具体的地名を挙げ、その地形の成立を、母蛇が起こした津波や地震に求める類話が多数あり、また、両目を失った蛇のために、寺で鐘を撞き、時を知らせるようになったというモチーフも各県に伝えられる [稲田・小澤 1980a: 28-29, 1980b: 46-49]。一連の伝承では、地形と毎夕の鐘の音に母親の記憶が刻印されることになる。

子は、母親の目玉を舐め・しゃぶり・吸って成長する。目玉は呪術的力を持ち、宮崎県西都市の「だんだん小さくなって、しゃぶっても何も出なくなり」 [稲田・小澤 1980a: 31] といった例外を除いて、完全に摂取されるわけではない。数々の類話のなかには、長崎県南高来郡の、目の玉を「なめさせると乳が出る」と説明をする例もある [同]。そもそも離別の前の母蛇は子にどのように栄養を与えていたのだろうか？福岡県山田市の事例では、妻が夫に咳払いを求めたのは、「女房が子供に乳を飲ませる姿を見せたくないのだと、感心していた」と語られる。異類婚姻譚における育児法は、まさに覗き見したくなるほど興味深い。この事例では、秘匿性の説明法が巧妙かつ上品といえよう。その「授乳」についてだが、シャットは、カニバリズムの定義に際して、爪噛みなどととも、判断がむずかしいグレーゾーンの行動と呼んでいる [シャット 2017: 29]。

いずれにせよ、身体の一部であった目玉をしゃぶることには、広義でのカニバリズム的要素が認められる。しかし、目の玉型は、わずかな例外⁷⁾を除いて母親を殺しはしない。奇太郎によるカニバリズムも、奇太郎の出生時に母親はすでに姑によっていびり殺されており、奇太郎が母親を殺したわけではないのである。

以上、奇太郎による創作上のカニバリズムについて議論してきたが、その過程において、カニバリズムの類型論に関して、いくつかの不備・不足が指摘できた。ここで、私見を述べるならば、カニバリズム全体の分類に際して、目的や動機によって細分される諸類型の全体にまたがり、族内食人か族外食人という二分法を、さらに、対象が死体であるか生体であるかという二分法、前者であるならば、自死を含めて意図的殺人を伴うか否かという、もう一つの二分法をそれぞれ交差させることが有益であると考えられる。

ところで、奇太郎の誕生と蛇女房譚とは、根本的な相違がある。奇太郎の両親に関して、少なくとも母は人間であるのだが、蛇女房譚においては、子の父は人間であるものの母が蛇であった。そして蛇の姿で育児を続けていたのである。したがって赤子は遺伝的にも環境的にも蛇の属性を潜在していると考えられる。しかしながら、蛇の子の特殊性を描く例は少ない。母親にとっては、正体を夫に見られたのが想定外であり、わが子を人間の子として成長させたかったかのように読み取れる。ただし、大分県日田郡の事例では、僧に育てられた蛇の子は「大きくなってから釘を打たないでお寺を造った」という [稲田・小沢 1980b: 47]。釘、すなわち金属は蛇が嫌うという民間知識に基づくのだろうが、世代を経て、短所が長所に転じたということであろうか。一方、奇太郎の場合、その超越した能力は、出自的に母親からの継承であるとは考えにくいのである。

なお、水木しげるが、初めて鬼太郎を描いたのは、『蛇人』という題名の1954年の紙芝居作品においてであった [平林 2005: 482]。水木の紙芝居は残念ながら残されていないが、平林によれば、「蛇の腹から生まれた鬼太郎が人間に育てられるが、貫われていった先々でいじめられたため、ついに蛇の本性を現して復讐する」といった怪奇談であったそうだ」という [平林 2007: 17]。

上述の「蛇女房譚－目の玉型」でも、子は「蛇の腹から生まれ」「人間に育てられる」。そして、大切な目の玉を殿様や盗人、村人に奪われ、まさに「いじめられる」。ただし、その後、「蛇の本性を現して復讐」するのは、子ではなく母親であったが、水木のこの作品が、間接直接問わず「蛇女房譚－目の玉型」に取材している可能性が高いと考えられる。今や内容を確認できないのが非常に残念である。

「蛇女房譚－目の玉型」では、母親の愛情のもと、その「目の玉」が身体を離れて人間界に留まり、子を育てる。この構図は、親の性を変えれば、鬼太郎の「おとうさん」(目玉おやじ)に重なるものといえよう。

6. 鬼子のイメージ

伊藤・辰巳による紙芝居の表紙は、奇太郎が墓穴を這い出す誕生場面であるようにも考えられる。だとすれば、いくつかの疑問が生じてくる。第一に、奇太郎が着物を着ていること、そしてその立派な前歯とおかっぱ状の黒髪である。これらが誕生時のものであったとすれば、「鬼子」の伝承が想起される。『日本国語大辞典』の「おにご【鬼子】」の項には「(1)鬼に似て異様な容貌で生まれてきた子。多く歯、または髪が生えて生まれた子にいう」「(2)鬼のように荒々しく強い子供」「(3)両親に似ていない子」との語釈が示され、別項「おにっこ【鬼子】」には「おにご（鬼子）に同じ」とある〔日本大辞典刊行会編 1973a : 698〕⁸⁾。

奇太郎の歯と髪は、彼の鬼子としての性格を訴えるに欠かせない要素といえよう。しかし、着衣と、散髪を経たように見える髪型は不自然である。一つの可能性として、辰巳が、この一枚の表紙面に異時同図を圧縮して描いたということが想像される。

ところが、この紙芝居『ハカバ奇太郎』の内容を記憶する1930年生れの藤川治水によれば、「奇太郎は悪者に発見され、墓場に逃げこむ。奇太郎が墓場に逃げこむ理由は、墓のなかで奇太郎を生んでくれた母親が、おそらく火の玉となって応援してくれるし、彼のウルトラC級の特技が、墓の上をヒョイヒョイと逃げることだから」だという〔藤川 1967 : 166〕。問題の表紙は、誕生時ではなく、墓場に逃げ込む様を描くものだとすれば、先の疑問は氷解しよう。着物を着、散髪を経ていることも当然となる。その場合、この紙芝居での奇太郎の誕生の場面が大変気になってくる。水木の鬼太郎と同様、裸で生まれてきたのだろうが、歯についてはどうであろう。しかし、「母の屍肉を食べるために歯は物理的にも必要だったはずである。やはり奇太郎は歯の生えた鬼子として誕生したと見るべきではなかろうか。そして、この表紙は、一定の成長後を「現在」としながらも、彼の入る穴は、過去に彼が這い出した墓穴でもありと考えられよう。

ここで、しばし鬼子の伝承をめぐる先行研究に注目し、奇太郎たちとの比較を試みたい。鬼子に関しては、初期の研究として、南方熊楠による「一枚歯：歯が生えた産れ児」（1915年）そして柳田國男の『山の人生』（1926年）における「鬼の子の里にも産まれしこと」がある。その後、1935年から1938年にかけての調査に基づく『日本産育習俗資料集成』には各地の伝承が掲載され〔恩賜財団母子愛育会編 1975〕、斎藤たまは、各地の明治30年代生まれの女性たちからの聞き取り調査の結果を報告・考察している〔斎藤 1985 : 93〕。下野敏見には「鬼子殺し」という衝撃的な伝承に関する論考があり〔下野 1988a, b〕、また、山田巖子による「異常児」全体を視野に収めたレビュー〔山田巖子 1988ab, 1993〕等は多くの情報と示唆を与えてくれ、本稿作成においても山田に負うところが大きい。

さて、南方（1915年）と柳田（1926年）の両研究は、それぞれ興味深い事例が多数提示されているが、出典を同じくする同一事例も紹介されている。例えば、柳田が「鬼子」の最も怖ろしい例とするのは、『奇異雑談集』記載の、明応7年（1498年）、京の東山の獅子が谷という村の鬼子である。「生まれ落ちたとき大きき三歳の子のごとく、やがてそこらを走りあるく（略）色赤きこと朱のごとく、両眼の他に額になお一つ目のあり、口広く耳に及び、上に歯二つ下に歯二つ生えていた」という。父親は手を咬みつかれながらも、これを槌で打ち殺す〔柳田 1989b：153〕。

柳田は、「日本はおろかなる風俗ありて、歯の生えたる子を生みて、鬼の子と謂ひて殺しぬ」という江戸初期の『徒然慰草』の記載を引用しているが〔同：152〕、かの弁慶もまた鬼子であり、父によって殺されることをその妹に救われて鬼若と名づけられている〔佐藤・小林 1968：131-133〕。

南方は、弁慶の誕生時の様子について、『義経記』の記載を引用している。懐妊期間は十八カ月で、「大きき二、三歳の児のごとく、髪は肩の隠るほどに生えて、奥歯向う歯ことに大に生えて産まれた」という〔南方 1971. 11：73〕。ちなみに『弁慶物語』では、弁慶は、天照大神を祭神とする若一王子の申し子として、三年間の懐妊後に誕生し、「常の人の三歳ばかりにぞありける。髪は首まで生い下がり、目は猫の目に異ならず」と記され、元和本では「眼は嶽^{いづ}を出る日のごとし、板歯^{むかば}は二重」とある〔徳田 1992：201-202〕。また、柳田が引用する『慶長見聞集』の記載では、江戸初頭に刑せられたあぶれ者、大島市兵衛は誕生時「骨柄たくましく面の色赤く、向ふ歯あって髪はかぶろなり。立って三足歩みたり。皆人は是を見て悪鬼の生れけるかと驚き」とある〔柳田 1989b：156〕。

「向う歯」「むかば（向歯）」とは、「向歯」ともいい「上あごの前歯」のことである〔日本大辞典刊行会 1976：8, 16, 37〕。弁慶たちには、歯の萌出時期に加え、萌出順にも異常があったようである。一般的に乳歯は、生後8～9か月頃に下の前歯2本（下顎乳中切歯）から萌出を開始し、続いて上の前歯2本（上顎乳中切歯）、その両端の歯（乳側切歯）が上顎・下顎の順にそれぞれ2本ずつ萌出する〔赤坂・西野・佐々・高木・田村 2007：60, 89, 91〕。

さらに、弁慶らがすぐに歩き出すというのも全くもって異様である。

その他の事例を加えても、鬼子のもつ特徴として、生まれながらに、①歯が生えていること、②髪が長いこと、③過度の成長、④歩き出すこと、事例数は少ないが、⑤眼に異常があること、などの身体的特徴に加え、⑥すぐにも殺されるか殺されそうとなること、などが挙げられる。

伊藤・辰巳の奇太郎が、①と②の特色をもつことは先述の通りであるが、先に引用した加太の回想の先行部分によれば、キタローは「長髪をふり乱した少年」であり、「せむしのような格好で目が異様に大きく前歯が二本突き出たグロテスクな形相でぼろぼろ

の和服を着ている。キタローは墓場の土中から屍肉を食ってこの世にでてきたのである」[加太 1971：85]⁹⁾。これらは③から⑤の特徴を描くものであり、祖母殺害後の遺族との対立を考えた場合、キタローには⑥の危険も降りかかったものと想像されるのである。

長髪

以上の諸特徴のなかで、①の歯はもっとも目立つ特徴といえよう。これについては後に詳しく見ることとして、先に②の長髪について考えてみたい。『日本産育習俗資料集成』の「食い初め・初生歯」の項には、全国各地の「鬼子」の名称が多出するが、そのすべては初生歯に関する記載である。一方、「産毛そり」の項は、産毛に関する多様な伝承が列挙されるなかで、長髪に関する記載は認められない[恩賜財団母子愛育会編 2008 (1975)：439-452, 403-414]。もちろん、調査項目に問題があった可能性も否定できないが¹⁰⁾、鬼子と長髪を結びつける民間伝承は希薄といわざるをえず、先の『日本国語大辞典』の「鬼子」の語釈「多く歯、または髪が生えて生まれた子にいう」の後半も、民間伝承とは距離があるものといえそうである。むしろ、こうした言説には、中世文学における像などの影響が推測される。

『弁慶物語』では、弁慶の誕生後、母は、老子が70年間胎内に居て鬢髭を白くして生まれたことを引き合いに、弁慶の長髪は、3年間の妊娠期間を考えれば当然のことと説明している[徳田 1992：203-204]。また、『義経記』では、山の井の三位夫人（別当の妹）が、武内宿禰が80年の胎内生活の後、白髪になって誕生したことを語っている[佐藤・小林 1968：133]。いずれも弁慶の生存につながる説明である。生活知とは距離がありそうだが、歴史上の偉人の挿話として人口に膾炙したものと考えられる。

ただし、『日本産育習俗資料集成』の「産毛そり」の項には、産毛の処理・保存に関する様々な伝承が列記されている。生後3日、7日、21日などの一定時期に産毛を剃る習慣が全国から報告されている。このことは、赤子の産毛が好まれなかったこと、ひいては鬼子の一要素が歓迎されなかったことを伝えているものといえよう。一方、産毛剃りに際して、後頭部の一部の毛を意図的に剃り残す習慣も広く分布し、万一の際に、神がそれを握って助けてくれるなどと説明している[恩賜財団母子愛育会編 2008 (1975)：403-414]。民間伝承は、産毛にマイナス・プラス両面の価値を与えているようだが、産毛剃りを拒否し続けた『旧約聖書』のサムソン[日本聖書協会 1976：360-366]にその原理を端的に認めることができよう。怪力を誇るサムソンと弁慶、そして奇太郎は、いずれも異常誕生譚を伝える長髪の「鬼子」だったといえる。ちなみに、水木の鬼太郎もかなりの長髪で誕生している。

過度の成長と歩行

③の過度の成長、すなわち生まれながらにして大柄であることも弁慶にその典型を見ることができる。しかし、『日本産育習俗資料集成』には直接の記載は見出せない。た

だし、過度の成長は、④の早期の歩行と連動しているものといえよう。赤子の歩行については、「初誕生」（満一歳の誕生日）に際して、赤子に一升餅などを背負わせ、歩み出したところで意図的に倒したり泣かせたりするという儀礼が各地に現存している。例えば、岐阜県上宝村見座では餅を背負ってもなお歩く子は、「鬼子だ、突き倒せ」といったという〔斎藤 1985：93〕。また、上対馬町では「誕生前に歩いた子には餅ついて箕の中に立たし、一升餅かろわせる」というが、「早く歩くのは、動物が生れてすぐに歩くように『けだもの仲間じゃ』という」説明が付随する〔同：96〕。そして、斎藤は、「親たちは子の成長の早いのを喜ばなかった。早くから歩いたり、歯が出たり、人並み以上に力のあるのを怖れた。何となれば鬼の子の可能性があったからである」と説明している〔同：103〕。ここに「鬼子」には「けだもの仲間」という理解が隣接していたことも確認できる。

眼の異様

⑤の眼の異様についても、『日本産育習俗資料集成』では、鬼子の要件に加えていない。通常の育児に際しては、眼は口ほどにものをいわなかったようである。ただし、柳田は、一眼の妖怪像とその成立過程に注目し続けていた。そして、水木もまた、自身の鬼太郎について、『妖怪談義』所収の「一眼一足の怪」からの影響を指摘している〔水木 1980：201〕。伊藤の奇太郎の場合、眼の大きさが左右で大きく異なるものの〔平林 2007：15、鈴木 2007：105〕、一眼とは呼びにくい状態にある。いずれにせよ、紙芝居上での視覚化が求められたとき、顔の中心部にある眼に特色を与えることにより、異常性が強調されることになろう。

歯の異常

①の歯に戻るが、出産歯すなわち生まれながらの歯は、民間伝承上でももっとも目立つ特徴といえ、萌出順も注目されている。伊藤・辰巳による紙芝居の表紙〔同〕でも、上の前歯が強調されており、藤川は、「ねじくれた小軀に、出っ歯の奇太郎という小童」と形容している〔藤川 1967-167〕。左右非対称でありながらも立派な前歯は永久歯にしか見えないが、このことは、鬼子の要件たる過度の成長を暗示しているのかも知れない。ここで再び、民間伝承に眼を向けてみよう。

斎藤によれば、九州の広くでは上の歯から先に生えるのがよくないとされており、佐賀県玄界町では「鬼の子」は歯が上から生えると伝え、熊本県天草市倉岳町では「上歯から生えると『親を食う』といって」、このような場合、一日で糸から着物を作り、藁人形に着せて海に流すという〔斎藤 1985：102-103〕。「親を食う」との表現が注目されるが、『日本国語大辞典』は「親食児（おやくいご）」という語を収録し、「満一歳の誕生日までに、立って歩けるようになった子供」と定義している〔日本大辞典刊行会編 1973b：104〕。北に目を向けると、生後六か月目の初生歯について、秋田県高鷲町付近では「親食うか身食うか」といい、福島県でも「親を食う鬼子」として忌み嫌い、茨城

県では「親をかむ」という伝承が認められ、いずれも形式的に捨て子にして難を逃れようとする風習を伴っている〔恩賜財団母子愛育会編 2008：439〕。獅子が谷の鬼子は誕生直後に父親の手に咬みついていたが、さらに注意したいのは、鬼子の歯に関する「親くい歯」なる名称の存在である。山形県小国町では六カ月目に生える歯を「親くい歯」と呼び〔斎藤 1985：101〕、八重山群島では、上から先に生えた歯をウヤファイバ（親食い歯）と称して大いに忌むという〔恩賜財団母子愛育会編：451-452〕。新潟県東蒲原郡では「親くい歯が生えると親が早く死ぬ」というが〔山田巖子 1993：274〕、これは比喩表現と呼ぶべきであろう。これらの語は物理的な「親くい」を意味するものではないかのようである。

ところが、下野は、まさに物理的な「親くい」を説く屋久島O村落のオンノコ（鬼の子）すなわち鬼子に関する伝承を紹介している。「難産死した女の腹を鎌で断ち割ってみると、歯の生えた子が入っているという。そんな子はオンノコである。オンノコは歯で母の胎内を食うという」のである〔下野 1988a：16〕。まさに母子間カニバリズムである。

伊藤の奇太郎による「親くい」、すなわち究極の族内食人は、こうした伝承を下敷にしていた可能性が指摘できよう。仮に、伊藤がこれらの伝承を知らなかったとしても、奇太郎に親の死肉を食わせるためには、まさに「親くい歯」たる切歯が物理的に必要だったはずである。

ちなみに、水木の鬼太郎誕生場面では歯は描かれていない。鬼太郎は、母親の埋葬から3日後に墓を這い出しており〔水木 2006（1960）：20-72〕、食人も切歯もともに必要はなかったはずである。

逃げ去ること

山田巖子は異常児誕生をめぐる各種の世間話において、生まれ児が何者かに連れ去られる事例に続き、自ら逃亡する事例を列挙し、興味深い指摘を行っている。すなわち、「異常児が逃げ込む先によって、その子が本来属する場所が知れ、それと同時に、その場所に棲むとされる、他界の精霊と異常児誕生の関係が想起されることになる」というのである〔山田巖子 1988a：8-9〕。藤川の記憶では、伊藤の奇太郎も「悪者に発見され、墓場に逃げこむ。奇太郎が墓場に逃げこむ理由は、墓のなかで奇太郎を生んでくれた母親が、おそらく火の玉となって応援してくれる」とある〔藤川 1967：166〕。異常児たちの逃亡に関する知識が伊藤にあったのかどうかは確認できないが、土中誕生という素性を語るには都合のよい行動だったといえる。もっとも、奇太郎は、尊属殺人罪の被疑者として追われる身でもあった。

7. 鬼子の親

奇太郎の場合は、繰り返しになるが、母親とは愛情で結ばれ、彼の生存のためのカニ

バリズムは母親も望むところであったかと考えられる。これは、Brady のいう(1)飢餓に際して親族に敬虔で自己犠牲的に食糧を提供する良心的行為としてのカニバリズム [Brady 1996 : 163] に相当しよう。ところが、下野の報告する屋久島の諸事例では前提が異なっている。R 村落では、「腹に悪い子が入ると、生んでみると歯が生えているのでわかる。そんな子は人間じゃなか、ケダモノじゃという。明治四十年代までは子が生まれるとすぐ口に指を入れてまわし、歯が生えているかどうかを見た。もし生えているとその頃までは殺した。そんな子を生かしておくと人の命を取るといった」という [下野 1988a : 16]。そして屋久島には、「オンノコヤキバとかオンノコヤキハマとって、歯が生えて生まれた子を焼いたという場所があちこちにある」という。「オンノコ」のとは「鬼の子」すなわち「鬼子」のことである [同 : 15]。さらに、下野は「不幸者の息子」への「制裁」という表現を用いている。弁慶がたどったかも知れない鬼子殺し、すなわち柳田が引用した「鬼の子と謂ひて殺しぬ」という『徒然草』の記載は、少なくとも一部の農民社会の間で常態化していた時代があったということになる。

下野は、鬼子を形式的・儀礼的に捨て子にして難を逃れようとする風習に対し、「鬼子殺しの残影」と考えることもできようとして述べている [下野 1988a : 20]。鬼子に対する各種の呪法は、たしかに実際の遺棄や殺害を連想させる。後者が前者に変化したという推測であるが、近代化の過程のなかで説得力をもつものといえよう。一方、柳田は、鬼子が生まれると歳神様へ上げた棒で叩くという東上総の事例に注目し、鬼子の「統御を神に委ねるの意味ではなかったか」と推測し、「上古の英傑勇士名僧等の奇瑞」との一致を指摘しつつ、「殺すということは少なくとも、古代一般の風習ではなかった」と述べている [柳田 1989b : 156-158]。

柳田は異類婚姻譚の起源を、神と人間との結婚に求め、「異類」を神々の零落した姿と捉えていた。蛇舐入しかり、猿舐入しかりである [柳田 1990a (1938) : 38-39, 1990b (1935) : 542]。多くの場合、鬼子の父親は「鬼」をはじめとする「異類」と認識されていたようである。そして、「異類」のメンバーは多様である。

上対馬町における「けだもの仲間」、屋久島 R 村落における「人間じゃなか、ケダモノじゃ」は、父子ともに獣が想定されているのであろうか。「鬼子」と「獣」のイメージの重複あるいは隣接は、古く『日葡辞書』(1603年)に遡ることができる。同辞書の「Vonigo. ヲニゴ (鬼子)」の語釈は、「長い髪の毛に長い爪、それにまた、犬や猪の持つような歯、すなわち、牙が生えて、怪物か野蛮人のような姿で生まれる赤子」とある [土井・森田・長南編訳 1980 : 714]。まさに獣のイメージが強調されている。ただし、「長い髪の毛」については、先述のように『日本産育習俗資料集成』に記載はなく、鬼子を獣に喩える例もまた同書には認められない¹¹⁾。

一方で、爬虫類も鬼子の親となり得るようである。南方による和歌山県西牟婁郡川添村での聞き取りでは、児女が玄猪いのこの餅を乞い廻る時、「亥の子の餅くれぬ者、鬼婆おにばばうめ、

蛇^{じゅうめ}うめ、髪^{かみ}の生えた子^こ生^なめ」と唱えたという [南方 1971. 11 : 74]。一種の脅迫であり、歓迎されざる子の姿がここにある。最後の「髪^{かみ}の生えた子^こ」はまさに鬼子であるが、「鬼婆」について南方は、「歯^はの生えた女^め児^こなるべく」と付記している [同]。ならばその親は誰であろう。柳田は鬼子と山姥との関係を論じている。愛媛県北部の山村で、山中で山姥のオツクネ（尽きることのない麻糸の球）を拾い、物持になったかわりに鬼の子を生んだという話を例示しているが [柳田 1989b : 158-159]、山姥は金太郎の母親でもあった。続く「蛇^{じゅうめ}うめ」であるが、蛇^{じゅうめ}の親は蛇である。柳田は、山中で女性が頻りに睡魔を催し、異人を夢みることあれば必ず^{はら}娠^{はら}み、「必ず歯^はを生じ且つ善く走る」鬼子を生むという『三国名勝図会』が示す屋久島の事例に注目するが、日向南部では、山中での睡魔と妊娠を蛇の所業のごとく信ずる者もあったという [同 : 159]。先述の蛇女房譚とは性別が逆転するが、いずれにせよ、「鬼子」は「異類婚姻」の産物であり、両伝承は不可分の関係にあるといえる。奇太郎の父親について、記録を確認できないのが返すがえすも残念であるが、蛇女房と奇太郎は、間に「鬼子」を介することで再び結びつく。そして、水木作品「蛇人」もその関係を踏襲したものといえよう。

8. 異類婚姻譚から見えてくるもの

以上、伊藤正美原作の奇太郎の背景にある民間伝承、とくにカニバリズムの問題と鬼子としての諸要素に注目し、先行研究を概観しながら、比較の作業を行ってきた。鬼子の問題と不可分となるのが異類婚姻譚であるが、これについては膨大な研究の蓄積があり、その起源をめぐる諸説が提示されている。S. トンプソンは、特に異類女房譚の発生について、(1)気象現象等の表れとする解釈、(2)原始トーテミズムとの関係を説くもの、(3)古代の儀礼の具体化とする説明を紹介している [トンプソン 1977 : 151]。先述の柳田の信仰起源説とでも呼びうる姿勢は(3)に相当するものといえよう。また最近では、F. Kobayashi は、ジェンダーのリアリティを反映するという日本の異類婚姻譚の性質を指摘している [Kobayashi 2015 : 120-122]。また、筆者は、台湾先住民における調査に際して異類婚姻譚が獣姦に関する世間話と交互に語られることから異類婚姻譚の獣姦起源説と呼びうる仮説を提示した [蛸島 2016]。日本やヨーロッパの異類婚姻譚の多くでは、異類は人間に変身して交接するが、台湾先住民の間では、変身を伴わずして多くの交情が語られるのである [同 : 55-60]。

今回、鬼子に関する先行研究、とくに山田巖子の研究に注目することにより、一部の異類婚姻譚の成立に関して、異常出産起源説そして嬰兒殺し投影説とでも呼びうるものが設定できるように考える。山田は、蛙・古狸・河童・猿猴・蛇の子を妊娠したという世間話を挙げ、その幾例かが胎状奇胎と呼ばれる異常妊娠を指すと思われると述べている。胎状奇胎はブドウッコとも呼ばれ、その形態が蛙の卵を連想させ、「蛙婿入り」「蛇婿入り」に生まれた子をブドウッコだったと語る例を示している [山田巖子 1988a :

3-4]。

山田はまた、「まれには姦通の結果生まれた子が異常児であったとするものもある」と指摘している [同：4]。さらに、山田は、昭和初期頃の廓で、遊女の孕んだ子は「鬼子」とされ、墮胎の施術は「鬼追い」と呼んだという竹内智恵子の研究を紹介し、「親にとって不都合な子」の総称が「鬼子」だったのではないかと推測している [山田巖子 1993：276]。下野も、子殺しは鬼子だけではなく、普通の子にも行われたという口述から [下野 1988a：18]、「鬼子殺しは見方によっては間引きの一種と見れないこともない」と述べている [下野 1988b：9]。嬰兒殺し (infanticide) が行われていた地域や時代があったことは否定しようもない。柳田國男が少年時代に茨城県布川で目撃した絵馬の話はあまりに有名であるが、この挿話の前には、医師であった長兄の所によく死亡診断書の作製依頼があったことが記されている。この絵馬では、嬰兒を抑えつけている母親の影絵に角が生えていた [柳田 1997：36-37]。親の側が「鬼」となり、命を奪われるのは、まさに「鬼の子」であった。

山田や下野の研究から、「鬼子」が多義的で、都合に応じて対象が拡大しえたことが理解できる。鬼子に関する「親を食う」という認識は、やむをえない場合の嬰兒殺しを正当化し、かつ、罪悪感を薄めたものと想像される。さらには「鬼子かも知れない」というグレーゾーンであっても同様な心理が働いたであろうし、反対に必要な想像を生んだことも十分考えられる。

先の蛙の卵の連想など、異類婚姻譚をめぐる民俗生物学的知識や言説には興味深いものがある。そして、両親の形質や性格の継承はいかになされるのか？ それは双方からなのかどちらか一方からなのか？ 異類婚姻譚は、民俗科学・民族科学の研究に多くの示唆を与えてくれよう。一方、嬰兒殺しとの関連等、異類婚姻譚や鬼子伝承の一部には、やむをえない現実的必要が実践され、そこに後付けされた解釈から成立したのものもありえよう。もちろん、同一の主人公について、複数の異説が併行する場合もある。小松和彦は、弁慶の誕生に関して、熊野に参詣した醜い女と天狗との間に生まれた子であるという「武蔵坊弁慶由来」の記載を紹介し「申し子とする思考と並んで、異類婚姻とする思考も、異常児としての弁慶の周囲には漂っていた」と述べている [小松 1978：99]。このような複眼的な思考を併存させる土壌は、後の世間話の語り方や紙芝居の描き方にも多様な選択肢を与えてくれたものと考えられよう。

奇太郎と鬼太郎の間にも少なからぬ距離が認められる。伊藤の奇太郎は、おそらくは人間夫婦のもとに産まれた赤子であったが、先述のように、その諸属性から、鬼子と位置付けられる。鬼や異類との血縁をもたなくとも、祖母への恨みという心理的要因、日本人好みの仇討ち思想という社会的背景が彼を鬼子にさせたのであろう。さらに、奇太郎の場合、敵対する相手は親ではなく、祖母、そしておそらくは人間社会全体であった。

一方、鬼太郎の両親は幽霊族の最後の夫婦、すなわち読者にとっては立派な異類であるが、夫婦間また鬼太郎との親子間では決して異類ではない。鬼太郎は、幽霊夫婦の実子であり、目玉となった父親と良好な関係を継続するのも通常の鬼子伝承とは異質である。とはいえ、水木の鬼太郎も土中より長髪で誕生し、後に英雄的な能力を発揮する。そして、鬼太起の名称自体が鬼子であることを自称しているものといえよう。水木の鬼太郎に関連する民間伝承については、機会を改めて考察してみたいと考える。

注

- 1) 筆者は先に、水木と民俗学との関係、のんのんばあが語ったとされる妖怪、水木自身のひだる神・べとべとさん・ぬりかべ体験について民間伝承等との比較を行った [蛸島 2018: 17-47]。
- 2) 本稿で引用・参照する藤川の著書 [藤川 1967] と加太の編著書 [加太 1985] は、姜の研究から存在を知ることとなった。
- 3) 鶴見俊輔は水木の大ファンであり、鶴見、加太、水木それぞれの間に交流があった。
- 4) なお、『遠野物語』は、同じく遠野で実際に起こった尊属殺人事件を収録している。一人息子が草刈鎌で実母を襲うのだが、この事件もまた嫁姑間の不仲に起因している [柳田 1989a: 19-20]。
- 5) 最近発表された山田仁史によるカニバリズムをめぐる研究史の概観は示唆に富み [山田仁史 2017: 127-163]、本稿の作成に際してもそこから多くの文献の存在を知ることとなった。
- 6) 竹内による二分法と水木／手塚の対比は卓見といえよう。ただし、私見ではあるが「民俗学的妖怪」と「生物学的妖怪」との間に、「民俗生物学的妖怪」なる範疇を設定できるように考える。民俗学の研究対象たる民間伝承は、民俗科学としての諸生物の観察に少なからず依存しているからである。例えば、ジャコウアゲハの蛹は皿屋敷伝承との関連で「お菊虫」と呼ばれていたが、その姿や生態に対する見事な観察の結果であるといえる。
- 7) 大分県南海部郡の事例では、「蛇は大洪水を起こして殿様の城を流してしまうが、蛇の淵は水が枯れ、両目のない蛇と父と子供が死んでいた」という陰惨かつ不当極まりない結末となる [稲田・小沢 1980b: 47]。
- 8) なお、『日本民俗大辞典』では「おにこ 鬼子」と「子」は清音表記で立項されている [山田巖子 1999: 272-273]。
- 9) 奇太郎の和服着用については、鈴木著書掲載写真に認めることができる [鈴木 2007: 109]。
- 10) 下野は、同書について「原資料の調査者の力量や関心度の差からくるバラツキもあろう」とコメントしている [下野 1988a: 19]。
- 11) 栃木県那須郡の「十月歯は十歯（獣歯）といって忌む」、山梨県南都留郡の「十二月目に生えた歯は馬の歯という」などの例は認められるが、これらの持ち主は鬼子とは呼ばれていない [恩賜財団母子愛育会編 2008: 439, 443]。同書収録の資料は、通常の出産を前提に収集されたのであり、獣の姿という異常性は世間話の独擅場なのかも知れない。

文献

〈英文〉

- Brady, Ivan 1996 Cannibalism *Encyclopedia of Cultural Anthropology* Volume 1 Henry Holt and Company: 163-167
- Kobayashi, Fumihiko 2015 *Japanese Animal-Wife Tales: Narrating Gender Reality in Japanese Folktales Tradition* Peter Lang, New York
- Lindenbaum, Shirley 2004 Thinking about Cannibalism *Annual Review of Anthropology* Annual Reviews: 475-498

〈和文〉

- 赤坂守人・西野瑞穂・佐々龍二・高木裕三・田村康夫編 2007 『小児歯科学』第3版 医歯薬出版
- 荒木博之編・宮地武彦・山中耕作 1987 『日本伝説大系』第13巻北九州編 みずうみ書房
- アレンズ, W. 著 折島正司訳 1982 (1979) 『人喰いの神話—人類学とカニバリズム—』岩波書店
- 飯島吉晴 1984 「骨こぶり習俗」『日本民俗学』154: 6-14
- 石山幸弘 2008 『紙芝居文化史—資料で読み説く紙芝居の歴史—』萌分書林
- 稲田浩二・小澤俊夫 1980a 『日本昔話通観』第24巻 長崎・熊本・宮崎 同朋舎出版
- 1980b 『日本昔話通観』第23巻 福岡・佐賀・大分 同朋舎出版
- 1985 『日本昔話通観』第3巻 岩手 同朋舎出版
- 恩賜財団母子愛育会編 2008 (1975) 『日本産育習俗資料集成』日本図書センター
- 加太こうじ 1971 『紙芝居昭和史』立風書房
- 1985 『名もなくすがしくしたたかに一街のエリート聞き書集—』筑摩書房
- 小松和彦 1978 『神々の精神史』伝統と現代社
- 姜竣 2007 『紙芝居と〈不気味なもの〉たちの近代』青弓社
- 近藤雅樹 2012 「現代日本の食屍習俗について」『国立民族学博物館研究報告』36(3): 395-407
- 斎藤たま 1985 『生とものけ』新宿書房
- 佐藤謙三・小林弘邦訳 1968 『義経記』1 平凡社 東洋文庫
- 下野敏見 1988a 「鬼子殺しの伝承(上)」『鹿児島民俗』92号 鹿児島民俗学会: 15-20
- 1988b 「鬼子殺しの伝承(下)」『鹿児島民俗』93号 鹿児島民俗学会: 7-15
- シャット, ビル著 藤井美佐子訳 2017 『共食いの博物誌—動物から人間まで—』太田出版
- 鈴木常勝 2007 『紙芝居がやってきた!』河出書房新社
- 竹内オサム 2010 「水木妖怪マンガ研究序説④: 水木妖怪マンガのルーツはアメコミにあった」桑田義秀編 2010 『最新版 妖怪まんだら—水木しげるの世界—』世界文化社: 68-69
- 蛸島直 2016 「プユマにおける異類婚姻譚とその一つの起源論」日本順益台湾原住民研究会編『台湾原住民研究』第20号 風響社: 29-72
- 2018 「水木しげるの作品にみる民間伝承の利用と潤色」『愛知学院大学人間文化研究所紀要 人間文化』第33号: 17-47
- 鶴見俊輔 2012 『思想をつむぐ人たち』河出書房新社
- 土井忠生・森田武・長南実編訳 1980 『邦訳日葡辞書』岩波書店
- 徳田和夫校注 1992 『弁慶物語』『室町物語集: 新日本古典文学大系55』岩波書店
- 鳥山石燕 2005 『鳥山石燕 画図百鬼夜行全画集』角川文庫

- トンプソン, S. 著 荒木博之・石原綏代訳 1977 (1946) 『民間説話—理論と展開—』(上) 社会思想社
- 日本聖書協会 1976 『旧約聖書』(1955年改訳版) 日本聖書協会
- 日本大辞典刊行会編 1973a 『日本国語大辞典』第3巻 小学館
- 1973b 『日本国語大辞典』第4巻 小学館
- 1976 『日本国語大辞典』第19巻 小学館
- 日野巖 2006 『動物妖怪譚』(下) 中央公論新社
- 平林重雄編 2005 「水木しげるの詳細年譜」水木しげる『完全版 水木しげる伝』下 講談社漫画文庫：479-513
- 2007 『水木しげると鬼太郎変遷史』YM ブックス
- 広岡勉 1985 「化猫映画」『平凡社大百科事典』11：1045
- 藤川治水 1967 『子ども漫画論』三一書房
- 水木しげる 1974 『小学館入門百科シリーズ32 妖怪なんでも入門』小学館
- 1980 「鬼太郎秘話」『SF 新鬼太郎』東京三世社：200-201
- 1981 『水木しげるの妖怪事典』東京堂出版
- 1998 『ほんまにオレはアホやるか』社会批評社
- 2006 『墓場鬼太郎①貸本まんが復刻版』角川文庫
- 南方熊楠 1971. 11 (1917) 「一枚歯：歯が生えた産れ児」『南方熊楠全集』第3巻 平凡社：67-78
- 柳田國男 1956 『妖怪談義』修道社
- 1989a 『遠野物語』『柳田國男全集』4 ちくま文庫：7-72
- 1989b 『山の人生』『柳田國男全集』4 ちくま文庫：77-254
- 1990a 『桃太郎の誕生』『柳田國男全集』10 ちくま文庫：9-421
- 1990b 「童話小考」『柳田國男全集』9 ちくま文庫：535-574
- 1997 『故郷七十年』『柳田國男全集』第21巻 筑摩書房：5-315
- 山田巖子 1988a 「他界へ帰るこども(上)」『法政人類学』第34号 法政人類学研究会：2-11
- 1988b 「異常児誕生をめぐる世間話」『社会民俗研究』第1号 社会民俗研究会：104-114
- 1993 「子どもと富一〈異常児〉をめぐる〈世間話〉一」『国立歴史民俗博物館研究報告』第54集 国立歴史民俗博物館：268-293
- 1999 「鬼子」福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄編『日本民俗大辞典』上 吉川弘文館：272-273
- 山田仁史 2017 『いかもの喰い：犬・土・人の食と信仰』亜紀書房

